

増える出沒、クマと人のすみ分けをどう考える

秋田でクマの生息地を訪ねて

森林文化協会編集長 松村 北斗

人里に出沒するクマが社会問題になっている。人身被害、農作物被害や観光地の休業といった経済被害など幅広い影響を暮らしに及ぼす。地方の人口減少が加速するなか、クマと人間のすみ分けについてどう考えるか。2023年度、県内で過去最多となる62件70人がクマによる人身被害に遭った秋田県で、クマがすむ地を訪ねた。

2023年度は全国で計198件のクマによる人身被害が起これ、統計が残るなかで最多となった。とくに秋田、岩手を中心に東北地方が計141件と大半を占め、その半数近くが秋田県で起きた。2024年度は秋田県内での人身被害は10件11人（2025年2月5日現在）と大幅に減ったが、11月末に秋田市のスーパーにクマが侵入し、従業員が負傷する事案が発生したり、雪が積もった後もクマが市街地に出沒したりするなどして、クマと人のすみ分けについて改めて関心を集めた。

秋田県内で30年近くにわたり、森や人里でクマの写真を撮影している秋田市の写真家、加藤明見さん（76）の案内で2024年6月下旬、秋田市のクマの生息域を回った。最初に向かったのはJR秋田駅から東に約25km、河辺三内地区のダムの周辺だ。

この時期、クマはヤマザクラやヤマグワの実を好んで食べていた。「クマが食べた跡です」。加藤さんが車を止めて手で示した先には、枝が折れて、葉が少ししおれたヤマザクラが道路沿いに生えていた。

「早朝と夕方が、クマがエサを食べる時間帯。近くで食べていればパキ、パキと歯でかんで枝を折る乾いた音が聞こえてくる」と加藤さんが説明した。

午前4時40分、ダムそばの路上に車を止め、音を立てないように注意深く、双眼鏡やカメラの望遠レンズで遠くの斜面を観察する。万一に備えてクマよけスプレーも携帯した。

数百m先の対岸を見ていた加藤さんが、「あの葉が白くなっている木も、その右上の木もクマがヤマザクラの枝を折って食べた跡だ」と説明した。

「クマが歩いた跡だな。少し前のものだ」。橋から数十m下を見ると、湖岸の土に足跡が残っていた。「何日かに一度はダムを泳いで、岸から岸に渡っている」。加藤さんはかつて、ここでクマがダムを泳ぐ姿を撮影したことがある。

近くの道路の真ん中にクマのふんがあった。サクランボの種がたくさん



クマがヤマザクラの実を食べるために枝を折った跡＝
2024年6月、秋田市、松村撮影



ダムの湖畔に残る
クマの足跡＝同

入っていた。クマの生息域に立ち入っていることを実感した。

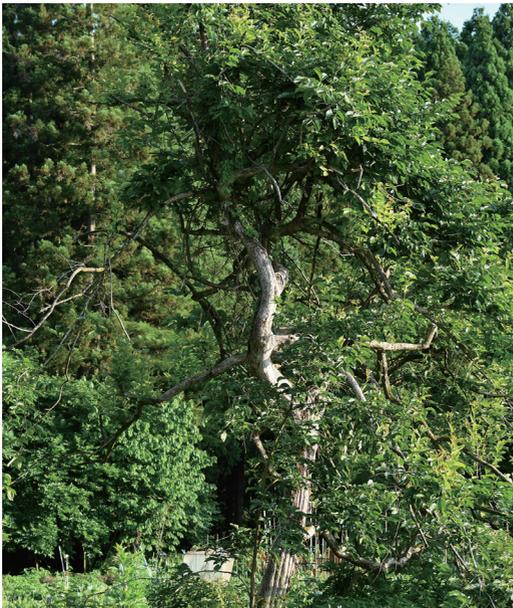
ダムから車で約6km、来た道を引き返すと、集落があった。民家のそばに植えられたクリやカキの木をよく見ると、1本のカキは幹から左側の枝がない。「去年はひどかった。カキもクリもあらゆる木にクマが登り、実を食べていた」と加藤さんは振り返った。

加藤さんが普段撮影している秋田市山間部のクマは、例年3月下旬ごろに冬眠から目覚めると、季節に合わせて春は山菜などの野草、初夏はヤマグワ、ヤマザクラの実、昆虫などを食べ、秋には冬眠に備えてブナやミズナラのドングリ、クルミなどを大量に食べる。「よほど食べるのに夢中だったり、かなり遠く離れていたりしないと、なかなか姿を撮影するのは難しい」と加藤さんは話す。先にクマが人間の気配に気づいて、姿を見せないという。

しかし、2023年は、ブナに限らずどの実も凶作で、山にエサがない状態



撮影の準備をする加藤明見さん
=同



2023年秋にクマが盛んに登っていたというカキの木。左側の枝が折られてなくなっている=同

だった。このため、9月から11月にかけて頻繁に集落に出没して、住人がそばにいても気にせず、カキやクリの木に登って枝を折ったり、地面に落ちた実をひたすら食べたりした。熟していない青柿まで食べる姿を、加藤さんは初めて見たという。

加藤さんはそんなクマの様子を何度も撮影した。カキの木に設置した赤外線で作動するセンサーカメラにもしよっちゅうクマが映っていた。

県は対策としてカキやクリの幹にトタンを巻いて、クマが登れないようにしたり、実を食べないなら伐採したりするよう呼びかけているが、この集落にも木の持ち主が住んでいない「放置柿」があり、対策が取れていない木も多い。

北西に約9km移動し、太平寺庭地区の森をめざす。集落を過ぎて川沿いの道を行くと、耕作放棄された田んぼがあった。「去年はイノシシ、クマが稲刈り前の米を盛んに食べ荒らした。今年はここで作るのをやめてしまった」と加藤さんは言った。



集落のそばで枝を折って、カキを食べるクマ＝
2023年10月、秋田市、加藤明見さん撮影

その隣のかつて田んぼだったところは雑草が生い茂り、ヤナギやヤマグワが生えている。「耕作をやめて数年もすれば、草が生い茂る。そうしてクマの住むエリアが広がっていく」

耕作放棄された田から 500 m ほど離れた山の斜面や川沿いにも、枝が折れて、葉がしおれたヤマザクラが何本もあった。一つはまだ生々しい。「昨日やったんだな」

この日、クマの姿を見ることはできなかった。しかし、夕方に訪れた森では、車を止めた道路の下の方の森から、重量感のある足音のような音が聞こえ、息を潜めていると遠くに去っていった。パキッという乾いた音もかすかに聞こえてきた。最寄りの人家から約 4km。人の生活圏でクマの気配を濃厚に感じた。

秋田県によると、県内のクマの生息数は推定で 2800 頭から 6000 頭（中央値 4400 頭、2020 年 4 月現在）。秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第 5 次ツキノワグマ）（2022 年 3 月）で、「本県ではかなり安定的な生息状況にあると推定される」との認識を示している。一方で個体群の存続や生物多様性の確保の観点から、年度ごとの捕獲上限は 1012 頭と定められている。ただ、有害鳥獣捕獲による捕獲は必要性があれば上限を超えてできる。2023 年度は人身被害が多発したことを受けて、有害鳥獣捕獲、狩猟などを合わせ



刈り取り後の田畑の奥に、耕作放棄された田んぼの跡地が広がる。草木が生い茂っていた＝2024年9月、秋田市、松村撮影



木に登ってクリを食べるクマ。まだイガが青い実まで食べていた
= 2023年9月、秋田県三種町、加藤明見さん撮影

て計 2334 頭を捕獲した。2024 年度の捕獲上限は、生息状況や、昨年度多く捕獲したことを踏まえて 670 頭と設定された。

2024 年度は前年度と違い、ヤマグワもヤマザクラも、そしてブナも実を豊かにつけており、クマがエサを求めて里山に出没する頻度は昨年より低かった。捕獲による頭数の減少も影響していると加藤さんはみている。

ただ、今後も山にエサとなる実が少ない年は再び出没が増えると考えている。人口減少と高齢化が進むなか、見晴らしをよくしたり、クマの通り道をなくしたりするために草木を刈れるのは、家の周りなどに限られるようになってきた、と加藤さんは実感する。「クマと人間の境界線を人間が作るのは限界に来ている。鉢合わせしないように人間がなるべく注意するよりない」と率直な思いを語る。

(本稿と秋田県専門職員近藤麻実さんへのインタビューは、朝日新聞デジタルに 2024 年 9 月に掲載した原稿を一部改訂して、転載したものです)